

児童文学の育つ条件 メキシコの場合

二ナ・ユイ・デ・長谷川

(以下は平成5年12月11日に児童文学学会で行われた講演である)

メキシコの文化にふさわしい独創的な児童文学が、メキシコという地で確実に育てられているかどうか、私自身は疑問に思っている。ここでメキシコにおいて、児童文学の育つ条件が存在するか否かを追求したい次第である。

日本人によって書かれているラテン・アメリカ児童文学についての記事はわずかであるが、安藤美紀夫著の「私が見た最近のラテン・アメリカ絵本」『日本児童文学』第二七巻第七号(一九八一年七月一日発行)と、浜田滋郎著の「中南米の児童文学」『日本児童文学』第三十二巻第四号(一九八六年四月一日発行)がある。この二つの記事は中南米児童文学の状況について極めて明確に述べており、十年以上前に出版されているが未だに現代的意義を失っていないためにここで引用

する。

浜田氏は中南米の児童文学の状況について次のようなことを述べている。

「中南米文学は、いまや世界的に一つのブームと言われるほど、広く注目される存在になっている。……主要作品の翻訳が行われ、日本での評価もいちじるしく高い。だが、いったん児童文学ということになると、中南米からはほとんどなにも聞こえて来ない。中南米の児童文学なるものがはたしてあるのか否かさえ、一般の人はわからないであろう……ちなみに筆者の知る限り、「中南米児童文学史」あるいは「ラテン・アメリカ児童文学展望」といった便利な書物は、何語によって問わず、まだ書かれていない。」という。

浜田氏の、この中南米児童文学についての感想はきわめて正しいと思う。中南米児童文学史に取り組もうとする者には、

まさにバイオニア精神が要求されている。各国それぞれの資料を積み重ね、無限に近い数々の疑問に、ていねいな答えを与えることで、初めてそうした歴史が明らかになるだろう。

数多くの疑問の中で安藤美紀夫氏は次のことを取り上げている。

「最近、(南米で)出版された絵本を見ていると……ストーリーの組み立てにはそれほど独創的なものはないけれども、絵はデイスニーの影響に左右されていないものがほとんどである。もっとも、それラテン・アメリカ的といえるかどうかは疑問であり、欧米のさまざまな絵本の絵に近いものが多数ある……。さらにもう一つの問題がある。……新しい絵本への試みと思われるものが、その国の子どもどの程度に読まれているのか、ということがある。……日本円で購入価格は二千四百四十円である。関税、送料を考えてもいかにも高すぎるのである。七百七十円といったものもあって、いちがいにはできないけれども、それにしても、こうした絵本に接することのできる子どもの層はそれほど厚いとは思えない」

安藤氏が指摘していることは真に大事なことである。貧富の差が激しい中南米の国々で出版されている絵本のほとんどは、ストーリーの組み立てには独創的なものがなく、挿絵は欧米のものを真似ており、しかも値段がかなり高いので、こ

く一部の子どものしか手に入れることはできないだろうという指摘は、きわめて正しい。私を始め、非欧米文化に生まれた子どもたちは、こうした、欧米文化のまがいもののような絵本に対して感動を覚えることができるかどうかが問題だと思う。児童が自分の生きている現実と完全に切り離れた児童文学に対して愛着を持てるかどうかが重要な問題点である。

なぜ中南米の児童文学は独創性を欠いているのか。メキシコ人の頭脳が独創性を欠いているのか、それとも生産されている絵本の環境が独創性を欠いているのが問題であるが、いうまでもなく、市販の児童向け絵本などをつまらなくさせているのは社会的環境だと思う。私自身、子供のころ、何を楽しんだか、どういうことに感動したのかを思い出してみると、それらは決して絵本などではなかったことに気づく。なぜなら私の触れた児童向け図書のどれもが、自分の生きている現実となんのかかわりもなかったためだろう。

私が思うのには、子供というもののエネルギーのほとんどは、まず自分を取り囲む環境を把握することと、それに適応することに向かっている。幼いとは言え、どんな文化に属する子供でも、まず自分が生きている社会のさまざまな矛盾に目をとめ、そしてそれらに対する答えを大人から得ようとするものだと思っている。大人から納得のいかない答えが来ることがあっても、子供というものはそれほど簡単にあきら

めない。あらゆる手段を使って、自分の環境にたいする正しい認識を求める。私もそうだった。南米の地に根づいていない、欧米の文化を下手にマネた市販の児童文学などから、なんの満足も得られなかったのはそのためだ。

南米児童文学をつまらなくしているのは南米の歴史的ジレンマそのものである。南米の歴史はいかなるものであるかを知らなければ、なぜ市販されている南米の児童文学に、南米独特の文化の香りがいいのか理解できないと思う。このわずかな空間の中で、欧米人の征服以来のメキシコの歴史的ジレンマを明瞭に語ることはできないが、ごくかんたんに言えば、1519年のスペイン人による征服以来、支配層はヨーロッパ的な「町」という空間に居座り、そこから征服された土着民をさまざまな方法で屈伏した。征服以来、ごく一部の尊敬すべき例外を除いては、新大陸全体で、主にヨーロッパ人の子孫の手によって、先住民の文化に対する徹底的な抹殺が行われてきた。その現実こそ、ここ五百年の北アメリカをも含めた我が新大陸の歴史の軸であり、本質だ。

都市に住む人々は、基本的に欧米に憧れている。農村の人々がおくる「メキシコという地に根づいた生活」は、彼ら都市の住民にとって見れば、近代化を妨げる下らないものに過ぎない。彼らの夢は、都市の文化を中心に、ヨーロッパでも通用するメキシコ国家を作りあげるということだ。

おおげさに聞こえるかも知れないが、本当の意味で「メキシコという地に根づいた生き方」を送っていると言えるのは、農村の人々だけである。彼ら農村の人々は、白人たちを恐れて遠い山奥に逃げ去ったインディオと同様、メソアメリカと呼ばれている文化を共有しているからだ。現在、農村で生活し続けている混血の人々は、征服以来のこの五百年の間、農村という空間から、植民地の価値観を代表する都会の文化に対するもの静かな抵抗をつづけてきた。この都市と農村の歴史的な対立は、当然、ラテン・アメリカ児童文学の在り方に影響を与えている。

私は中南米の場合、都市と農村の児童文学は分けて考えた方がいいと思う。しかるべき「メキシコ児童文学史」は、要するに「都市の児童文学史」と「農村の児童文学史」という二部から構成されなければならない。前述した二人の日本研究者が指摘したのは、要するに欧米にしか目を向けていない、都市の児童文学を指していたのだと思う。都会の大きな書店で売られている「南米児童文学」というものは、いわゆる都市の文化に属したもののばかりである。理由は簡単だ。国をリードし、マス・メディアを握っているのは、おおかた欧米に憧れている都市の人間だからである。

恥ずかしい話であるが、下層階級を除くと、都市の子供たちのなかには、知らず知らずのうちに人種差別を持つように

教育されている子供たちがいる。農村出身の人々は「二流人」で、都市出身の人々、すなわち欧米らしい生き方を送れる人々は、優越した人種だと本気で思い込んでいる子供たちがいる。都市の中流階級の大人のほとんどは、自分の生きている現実から完全に切り離されたところへ児童の目を向けさせている。安藤氏が指摘するとおり、「独創的な児童文学が見当たらない」のはそのためだ。

誤った社会認識を植えられている都市の子は、どのようにして「メキシコという地に根づいた生き方」を無視するように教育されて行くか。ここで私、個人の例を出したいと思う。

私は一九六〇年代のメキシコシティに生まれ育った。父親はヨーロッパからの政治亡命者で、いわゆる中流階級に属する人間だ。そして母親はフランス人である。そのために小学校から高校までずっとメキシコ・シティのフランス学校に通った。学校の級友の中には、私のようなヨーロッパ系のメキシコ人もいたが、そのほとんどは外交官の子弟や、メキシコ人のエリート階級（政治家・思想家など）の裕福な子供だった。その学校へ通える者は、絵本一冊のために七百七十円でも二千四百四十円でも支払える層だった。

仏墨学院すなわちメキシコのリセ・フランセは、要するに、ほとんど我が子に欧米の実力を身に付けさせたい社会層から成っていた。先進国を目指す途上国メキシコのリーダー達は、

当然、欧米をマネることと必死だ。裕福な彼らは努力をおしまない。冬休みの間にアメリカへ飛んで、雪を知らない我が子にスキーをさせたり、夏休みの間にフランス語の練習のためにパリへ二か月行かせたりすることが普通だった。私は幸か不幸か、母親がフランス人であったために、学費の三分の二の割引があったので、そこへ通えただけで、ふだん、そんなぜいたくな暮らしを味わったことはない。その代わりに、ある程度、リセ・フランセの他の子供たちよりもメキシコという土地に根づいた生き方を送った。

仏墨学院での教育制度は、完全にフランスの学校のシステムに基づいている。小学校では、地理も歴史も教えられるのはフランスのことばかりで、メキシコのこととは何ひとつ教えられない。したがって、私が「メキシコという土地に根づいた生き方」を送れたのは、学校へ行かない時間帯と、日曜祭日、三ヵ月から四ヵ月続く夏と冬休みの間だけだった。母はフランス人、父はスペイン人ということから、確かに私は特別なケースであるかも知れない。しかしメキシコにおける都市の中流階級というものは、多かれ少なかれ、「メキシコという土地に根づいた生き方」を送っていない者ばかりだ。

白人の血を誇るように教育されている都市の中産階級の子供たちは、どのようにして大人の要求を感じ取っているのだろうか。私自身は、スペイン内戦で政治亡命を選ばざるを得

なかったほどリベラルな家庭で生まれ育ったから、白人の血を誇るように教育されていた覚えはないが、メキシコ・シテイに生まれただけで、ごく当然のこととして、都市の中流階級の文化に属する子供たちの生活を送った。ここで、そうした都市生活で育った子供の心について語りたいのである。

五歳から始まって十八歳まで続いた私の学校生活は、前に述べた通り、きわめて人工的なものだった。学校で過ごす時間はまさに外国留学のようだった。先生たちは、ほとんど一人残らずフランス人で、授業もフランス語で行われ、教育内容もフランスの文部省に定められたものだった。メキシコに住んでいながらも、学校でスペイン語すら話せない。フランスの教育は、当然フランスという地に根づいているから、社会科学ではワインとかチーズの産地が教えられ、歴史ではナポレオンとかジャンヌ・ダルクのことが教えられている。

要するに理想的な「エリート教育」を受ければ受けるほど、メキシコという地と接触する暇がなくなるわけだ。建前では「母国をよくするために私立学校へ通う」と言うが、実際には母国の心と触れ合うチャンスもない都市の中産階級人たちである。なにしろ私立学校のほとんどが「文明の手本である欧米」に心を捕らわれているのだから。

あたかもアラビアの女性のように、自分の家の壁以外、外界に触れるチャンスのない南米の都市の子供たちは、それでも

やはり、大人によって隠されている豊かなメソアメリカ的な文化を求めているように思う。少なくとも私はそうだった。十一歳になるまで一度も一人で外へ行ったことのない私、すなわち長い時間を家の中で過ごした私は、外の世界に飢えていた。そのためにも、無意識の間に必ずと言っていいほど、しっかりとアンテナを立てていた。もちろん私にかぎらず、都市の中産階級の子供は皆自然にそうしていると思う。

私は、いわゆるエリート教育を受けながらも、小学校のころはほとんど言っていないくらい、教科書以外の本を読んだことがない。それは当時の学校の制度に、次のルールがあったためである。私の教室の中には、フランスから輸入された、質のよい、とても美しい児童の絵本などを多量に備えた立派な書棚があった。土曜日には授業がなかったために先生は金曜日ごとに、自分の手で、そのなかから一冊づつを選んでクラスの子に配り、週末の間に読ませた。金曜日は絵本を買ったり、図工したりする楽しい日だった。

しかし、金曜日は同時に、私のようなふだんでの悪い子を罰する日でもあった。その罰する方法の一つが、「絵本を借りさせない」ことだ。できの悪い子ならば、かえってたくさんの本を読ませるのは、いまの私たちの常識だが、当時の私の学校には、そうした常識がなかった。

「本なんかどうせ嫌いだ」という、すっぱい葡萄の心理が

生まれた。六年生になって初めて、できの悪い子を実力ある子に変身させようとする先生と出会い、私にとって本当の意味での本との付き合いが始まったのはそのときからだ。

では、学校以外の時はどうだっただろうか。辞書のように分厚い十数冊からなる、『MI LIBRO ENCANTADO』（私のおとぎばなし）という児童書を父から買ってもらったが、それは私が頼んだのではなく、たまたまどこかのセールスマンが売りに来たものだった。どういう基準で編集された本かはわからないが、少なくとも、自分の生きている現実と無縁のものであった。私にとってあの本を読むよりも周囲の環境と接した方がはるかに楽しかった。

午前八時から午後二時三十分のあいだに、メキシコという地と接触できたのはわずか四十分ぐらいの、つぎのような時間だった。毎日かならず、子供の登校と下校の時間になると、学校の門の前には、子供目当てに数多くの露店が出現した。農村から出てきたメキシコ・シティの下層階級の人々が、自分の商品を持ち出して売るチャンスなのだ。一瞬の間に、我がフランス学校の校門付近は、メソアメリカ的な市場に変身していた。日本で言えば縁日の雰囲気だった。果物屋さんの屋台にはその場で食べられるように用意された、さまざまな野菜や水菓子が並べられていた。その隣にはヒヨコを売っている店もあれば、楽しそうな収集する絵を十枚セットで売る店

もあった。

親の送り迎えを待っている時間だけがいくらか自由だったが、残りの時間は大人と一緒にでなければ外へ行けなかった。外の世界を覗きたい子供にとっては実に不自由な状態だったが、いつも知恵を働かして、隙間をうまく利用することで、そのハンディをカバーした。家の手伝いさんがお使いに出かけようとする、すぐに、彼女にお供してついていくのも一つの手段だった。

農村から出稼ぎにメキシコ・シティに出てきた私のお手伝いさんたちは、私の一番いい友達でもあった。私はアイロンをかけている彼女らと、長い時間、会話を交わしたものであった。親が共働きで、留守がちだったために、彼女らは私にとって、夏目漱石の『坊ちゃん』の清ではないが、親の次に大事な存在だった。外の世界を覗かせてくれるのは彼女たちだった。もし私が男の子で生まれたら、また彼女たちとの関係も変わっただろうが、同性者同士だったので、それは内密な仲だった。

父と母が留守の間は家は子供とお手伝いさんの天国だった。要するに「猫が留守をすると、鼠は羽を伸ばす」という雰囲気、ふだん母が決めてこしらえてくれることのないメキシコ料理のオン・パレードだった。ラジオ番組のリクエストに、好きな曲を申し込んだり、好きなテレビ・ドラマに熱中した。

同時通訳者の母と弁護士之父がやらせてくれない「下らない」ことの全てが、お手伝いさんのおかげで味わえたのだ。日本の「女、子供」の世界に相当する世界として、「女中、子供」の世界があったわけだ。

未成年から年寄りまで、私の家に来た住み込みのお手伝いさんは、一人残らず気持ちのいい人たちだった。陽気で、大胆で、暖かった彼女らは、かろうじて読み書きが出来るかでないかで、学校などの世界とは無縁の人たちだった。しかし、私は彼女らと付き合って、人間の心のたくましさと学校教育など、まったく関係がないことがわかった。子供心にもなぜ学問を持った人は、持たない人に威張っていいのかわからなかったし、また、なぜインディオの豊かな生活観が“二流のもの”とされているのかも納得できなかった。

貧富の差と人種差別に囲まれていた私は、頭と心の中に多くの矛盾を抱えていた。そうした難問への明確な答えを求めれば求めるほど、私は外の世界との接触を望んだ。しかし子供の私には自由がなかった。すると、やはり無意識のうちにあらゆる手段にアンテナを向けた。ラジオ、テレビ、そして五階のアパートのバルコニーから見えてくる道路やそこへ取り掛かる人々への関心がいつそう深まった。

五階のアパートのバルコニーの座席から、さまざまな旅芸人のショウを見た。火を呑む男とか、釘の台の上を歩く男を

見たのもそこからだった。オルガン弾きの男、セレナードを奏するために雇われてきたマリアッチのトリオも……。農民の独特な服を来たまま楽器を弾いて、帽子に銅貨を求めた五人の男たちもそうだった。古くからメキシコの主食であるトルティーヤを籠に入れて、門を叩いて売り歩くインディオのおばさんも、重たい二十キロのプロパン・ガスのタンクを運ぶ屈強な中年男も、また、夕方、車を引いて焼き芋を売る青年も、みな、私の五階のバルコニーの座席から見た。薬局から薬を配達にくる青年にそそのかされた田舎出のまだ幼い女中も、そこから見た。

子供の時、私は芝居へは一度か二度しか連れていってもらえなかったが、私のアパートの五階のバルコニーからは、毎日と言っていくらい、メキシコという地の日常生活のリアルな芝居を見ることができた。学校の同僚が、欧米という幻想をみているあいだに、私はこの形でもってメキシコという地に根づいた生き方を眺めていたわけだ。

テレビやラジオも私の強い味方だった。彼らを手掛かりにして広い世の中の知識を深めることができたゆえに。日本の落語家に相当する、メキシコのコメディアンたちや南米音楽を作った庶民階級出身の王者たちも、しばしばテレビに上演したりした。彼らの存在はいうまでもなく欧米に模倣した児童文学の絵本などに絶対に登場したりはしない。

実はメキシコという地に根づいた児童文化は、まるっきりなかったわけでもない。歌とか芝居の世界にはそれがあった。都市に住む私の世代が子供の頃には、次の二人の人に大変お世話になっている。それはCuchiという名で知られている音楽家Fernando Gabiñondo Solerと、Cachiruloという名で知られている俳優Enrique Alonsoである。二人ともテレビとかラジオで大いに活躍したので、ある意味で狭い中流階級の子供だけでなくて、広く国中の児童の心を捕らえた人たちだ。

Cuchiの歌は、リズムはとてにぎやかなのに、その歌詞には、真白い肌に懂れて悲しむ黒人の女の子が登場したり、子供の養育費が必要なのに、怠け者の夫に一文も貰えない母親の苦勞話が歌われたりしている。このようにCuchiの歌は、メキシコの現実と密接に関係している。都市の子供は人一倍現実には敏感だけに、Cuchiの歌は彼らの心に強く訴えた。もちろんメキシコ社会の現実には、なにも暗いことばかりではないから、家族の風景、親子のきずなをテーマとする楽しい歌も数多い。夜のおやすみのキス、自転車に初めて乗った時の体験、食事の時間にわがままを言って家族中の者を困らせている子供の様子、古い物をしまっているおばあちゃんのお宝の中をどうしても覗いて見たい子供心など、どの階級の人々にも通じる「場面」が歌詞となっている。

これは決して偶然ではない。Cuchiにとって、これらの「場

面」は、社会のあらゆる階級の家庭に届くラジオの歌にふさわしい内容だったのだろう。南米の豊かなリズムに合わせて踊る「蜘蛛」、スペインの地方音楽の中から登場する「お化け」なども、老若男女を問わず喜ばせた。その意味で、Cuchiは、メキシコ独自の童謡の作者であるばかりでなく、スペイン語文化圏全体に通用する童謡の作者とも言えるだろう。

Francisco Gabiñondo Solerは、1907年にベラクルス州のオリサバ市に生まれ、1922年にメキシコ・シテイに出る。ボクサー、銭湯でのピアノ弾き、闘牛士などさまざまな職業についたのち、1932年からラジオに出演した。ピアノを弾きながら歌うユーモラスな歌が評判となり、1934年にCuchiという名で子供の歌の番組を持つようになった。1962年に引退し、1990年に亡くなった。

メキシコの児童文化が白雪姫やシンデレラなどのヨーロッパの物語に占領されている中で、Cuchiの童謡と、Cachiruloの芝居はとても新鮮でした。Cuchiを私は直接見ていないが、映画さえ作られているし、時々テレビの番組にも取り上げられている。

子供達に「Cachirulo」という名で知られていた俳優Enrique Alonsoは一九二四年九月九日にシナロア州マサトラン市で生まれ、子供のころ、家族と共にメキシコ・シテイに出る。一生に渡ってメキシコの児童文化に積極的に参加し、人形芝居

などにも大きく関わってきた一人である。彼の研究はなされていないが、彼の活躍は十分以上南米の児童文学史の一部を占めているはずだ。

Cachinlo については、残念ながら何の記録も書かれていない。私は1992年、彼の家を訪問したが、彼自身の手元に彼の活躍についていままで書かれていた記事が一つもなかった。私、私も頼るべき資料を持たない。

おおおっはに言えば、彼の番組、「El teatro fantástico de Enrique Alonso」(エンリケ・アロソンのファンタスティック劇場)は毎週日曜日夜七時から一時間にわたっておこなわれていた。彼の話によると、番組が始まった時のスポンサーは「REFERESCOS TIN-TAN」というサイダーの会社だったが、そのうちに「CHOCOLATE AZTECA」というチョコレートの会社に権利が渡されたそう。毎週の出演に追われていた彼は、次から次へ世界の児童文学を上演した。それはヨーロッパのおとぎ話とか、アラブとか日本とか中国のものが多かったがメキシコのもの、コミカルなものもあった。

私自身、熱心にこれらの番組を見ていたから言えるが、彼の劇の内容は外国の児童文学に基づいてはいても、話しぶりなどがきわめてメキシコ的であったために、子供たちの心をちゃんと捕らえることができたのだろう。心のこもった彼の演劇は、彼のはなしによると、十七年間ものあいだ続いたそ

うだ。しかも、その間、彼はメキシコ中の劇場で上演したりした。

彼の作り出した人物のいくつかを挙げよう。それは「Cachinlo」(カチルロ青年)「Fanfarón」(はら吹き屋)「La bruja Escaldua」(魔女のエスカルデウファ)「Las tías Altamira y Altagracia」(アルタミラとアルタグラシア伯母さん)「Doña Cuquis la raita」(雌鼠ミス・クキス)「el niño Pocholo」(ポチロ小僧)である。テレビで全国に有名になった彼は、今年70歳になったが、元気で大人になった当時の子供に相変わらず愛されて俳優の仕事が続けている。

ところで、私の現在の研究対象は、メキシコの19世紀後半の大衆向け出版社バネガス・アロヨ社であるが、その社の出版物の中で、挿絵入りの児童文学も大事な部分を占めている。私自身は子供のころ、これらの「赤本」には一度も触れたことがないし、しかも現在それらは買い求めることが不可能なため、いまの子供でそれらの絵入り物語を知る者はまずいないと断定できると思う。

とはいえ、今まで全く研究されていないこれらの絵入り物語は、おそらくメキシコの19世紀後半の児童文学史上、きわめて重要な章の一つか二つを占めていると言ってもおおげさではない。それらは現在、メキシコの市販で売られている、何の味も個性もない典型的なつまらない絵本とは比べ物になら

ない程、質が高いものである。農村の文化に近いメキシコ・シティの下層階級の読み物だったことから、紙の質などがいいという意味ではない。内容の質がいいということだ。それらの本の挿絵は、メキシコ版画美術のナンバー・ワンと言われ、リベラなどメキシコ画壇に多大な影響を与えた、ホセ・グアダルーペ・ポサダの手になるものである。当時のポサダはまったく無名だった。

大衆向け出版社、バネガス・アロヨ社の社長、Don Antonio Vaneegas Arroyo 氏どんな人物だったのだろうか。当時のバネガス・アロヨ社の宣伝によれば、それは次のようなものだった。「私は／多産で大まかな／芸術的な趣味を持った／印刷工だった

私は多様な小冊子／恋愛の詩／物語や歌を出版した／それらのものを通じて／人々の心に／娯楽の／心楽しい無数の瞬間を／与えるのに成功した
そうして疑い深い心には／想像の／甘美な激しさを／与えるのに成功した

若い男には／思い女（びと）の／不可思議なことを与えた
それらのことばは／熱烈のあまりに／荘厳な一枚一枚の／私の出版した手紙集は／

恋愛を／いっそう親密な仲へと／導いた

無邪気な何千何万というおはなしの／愛情に満ちた格言を／

教えるために／この国をいっばいに／その無数のあら筋をあふれさせた

恐ろしい精霊や一つ目入道／魔女／やせぼっちないたずらおばけ／陰気な妖怪に

王女や王子／数百もの奇形な人々が／棲息している／幻想的な物語を／この国にあふれさせた……というものだ。

以上いさご紹介したCr·Cr·Cr、Cachirulo、バネガス・アロヨ社などは、私から見て「都市の児童文学」と「農村の児童文学」という両極端をひとつに結ぼうにした者だった。もし中南米に独自の児童文学が育ったとしたら、彼らはその大黒柱であろう。

現在、バネガス・アロヨ社が出版した多数の児童文学が、いかなる児童文学の影響を受けているかを研究するだけで「メキシコ児童文学史」に立派な成果を挙げられることだろう。